

冬空を見上げて

野宿 良太

そんな藍子が、写真の中では、あんなに幸せそうに笑っていた。俺には似ても似つかない、優しげな微笑をたたえた男性の隣で。

伊藤慎也さんと他友達六人が「いいね！」と言っています。

そんな一文と共に、純白のウェディングドレスに彩られた藍子の写真が表示された。

「あー」

結婚したのか。

もう、未練だとか、そんなものはとっくに捨て去ったと思つていたけれど、幸せそうな藍子の笑顔を改めて突き付けられると、なんだか胸の奥の方がチリチリと疼いた。

まだ、俺たちが付き合つていた頃のことをふと思ひ出しかけ、すぐに考えるのをやめて、ダウンジャケットを羽織り家を出た。

流石に年の瀬も迫るこの時期に、ダウン一枚を重ね着した程度では、夜の冷え込みは防げるものではなかった。背中を丸めて、便所サンダルをカタカタ鳴らしながら、近所の酒屋を目指す。その酒屋の脇に設置された自販機は、いまのど時世にしては珍しく、深夜でも酒類を買うことができる。

街灯の下で、今日も自販機はほのかに光を放っていた。温かさを感じさせないその白い光に、なぜか安心感を覚えながら、誘蛾灯に吸い寄せられる虫のように、足を速めた。

震える手で小銭を入れて、発泡酒を購入する。プルタブを起こして、一口、流し込む。冷たい液体が、喉を通り過ぎていく。

藍子が最後に俺に見せた表情は、泣き顔だった。

もう一口、酒を煽りながら、空を見上げた。オリオン座が、大きく夜空に浮かんでいた。

はあと吐いた息が、星座を白く煙らせた。

その吐息が、霧散した直後のことだった。

夜の闇を縫うように、長い光の尾を曳いて、流れ星が墮ちていった。

時間が、止まつた気がした。

握りしめた缶の冷たさを右手に感じながら、流星が消えたあとを見詰めつづけた。

——しし座流星群、見に行こうよ。

遠い思い出の中で目を輝かせて提案する藍子の姿が、蘇った。

俺は、なんて答えたんだったかな。あれからもう、ずいぶん遠くに来てしまった。

「どうか……」

心の中で、小さく呟いた。

「どうか、幸せであつて下さい」

すでに夜空から流れ去つた星に願いを込めて、小さく、呟いた。